

# 震災6年

防災力を高める④

「あれだけの犠牲を出したというのに……」住民201人が津波で命を落とした宮城県石巻市上釜地区。町内会自主防災会で事務局長を務める井上達彦さん(65)が顔を曇らせた。

自主防災会ができたのは2年前。避難路マップを作り、震災前はなかった避難訓練も始めた。しかし、訓練の参加率は2年連続で割に落ちた。『あんな地震、もうないよね』って思われているとしたら怖い』と井上さん。

被災地で4年ぶりの津波警報が発令された昨年11月も、支援が必要な15人のうち、2人しか連れ出せなかった。井上さんは根気よく住民に訴えていくつもりだ。『今は震災後じゃない。次に備えなきゃいけない震災前なんです』

6年前の惨状を目にした人間にも風化の波は迫る。あの緊張感を覚えておくことこそ、本来は防災力強化に最も効果があるのだが、思うようには運ばない。時にその努力は住民感情とぶつかる。

千葉県浦安市では市域の86%が液状化に見舞われた。地表から1層ほど飛び出したマンホールが、今も公園の一角に保存されている。住民からは『つらい記憶を思い出す』『地域のイメージが悪化する』という声もあったという。

市はこのコメントの周りに植樹するなど、目立ちすぎないようにした。記憶をモノで残すには、被災者への十分な配慮が必要だ。

## 語り部たち 風化との戦い

一方、被災体験の語り部たちも、住民の思わぬ言葉にショックを受けるようになった。

「いつまでやっているの」宮城県南三陸町の語り部伊藤俊さん(41)は、最近こう聞かれたという。過去の津波の教訓を生かしていたら、6年前も救えた命はもっとたくさんあったはずなのに。

「語り部バス」ツアーは、伊藤さんが普段働く「南三陸ホテル親洋」の宿泊客を対象に、毎朝約1時間行われる。伊藤さんとホテルスタッフ8人が交代で語り部を務め、これまで10万人以上を案内した。

破壊された庁舎や学校、病院の跡地を巡るバスの中で、



「語り部バス」の参加者に当時の状況を説明する伊藤さん(宮城県南三陸町で)

### 「今は次に備える震災前」

最大20分の津波が襲った時の様子を披露すると、涙ぐむ参加者も。「語り続けなければ……津波で消えた街並みが初めからなかったことになってしまっ」。伊藤さんは力を込める。

2月末、兵庫県淡路市で「全国被災地語り部シンポジウム」が開かれた。阪神大震災の語り部や、昨年4月に起きた熊本地震の被災地関係者も登壇。教訓を伝え続けるため、各地の語り部が連携していくことが確認された。

「コーディネートを務めた神戸大名誉教授の室崎益輝さん(防災計画)は語り部の裾野をさらに広げるべきだと訴える。「教訓を伝える主人公になるべきは人間だ。みんなが語りなければいけない」。日本は首都直下地震、南海トラフ巨大地震など様々なリスクを抱える。行政任せにせず、我々一人一人が防災力を高めるには、過去の震災犠牲を無駄にしないという姿勢が出発点といえそうだ。

(おわり)  
竹之内知宣、斎藤圭史、古岡二枝子、及川昭夫が担当しました。



液状化で飛び出したマンホール。周囲に埋まるなどして保存された。(千葉県浦安市の高瀬中央公園で)



津波が襲った6年前の石巻市上釜地区。井上さん宅(井上達彦さん提供)の光景だ。